
能力者一家、田村家の日常

白いサンタクロース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

能力者一家、田村家の日常

【Nコード】

N8545X

【作者名】

白いサンタクロース

【あらすじ】

夫婦と子供が三人

田村家はごく一般的な家庭である

全員が能力者であっても不思議ではない

能力者は世間に認知されているのだから

この物語は、田村家の日常を描くほのぼのとした物語である

午前零時のプロローグ（前書き）

能力もの〓バトル

じゃなくても良いんじゃないでしょうか？

午前零時のプロローグ

能力者

所謂超能力者の類いだ。

ある者は自らの姿を透明にし、ある者は身体から炎を放ち、ある者は巨大な虫を操り、またある者は貫いたものを凍てつかせる槍を持った。

能力者の種類は大きく分けて4種。

特異体質の身体を持つ【肉体型】。

精神力を使い不可思議な現象を引き起こす【精神型】。

強大な力を持つ生物や魔物を呼び出し操る【召喚型】。

特殊な力を持つ道具を呼び出し操る【道具型】。

この4種である。

彼らは一体何者か？

それはまだ解明されていない。

突然変異、生物兵器としての先祖帰り…さまざまな説があるがどれも決定的ではない。

六十年前に突如として現れた能力者達は、初めは人口の2、3%しかいなかったが、殆どの国が彼らを受け入れ保護・優遇し、さらに能力者である事は遺伝するため能力者達はどんどん増え、現在は10倍以上まで増えていった。

この物語は、強大な能力を持つ少年がその力を用いて己の欲望を満たさんとする悪を討つ物語……………

……ではなく、とある能力者一家の平和な日常を物語るストーリーだ。

バトルではない。

午前零時のプロローグ（後書き）

多分更新遅いです

一撃必殺で家庭円満（前書き）

登場人物は漫画的、アニメ的な容姿ですが、あくまでキャラ付けのためですので気にしないでください

なお、次回から前書きで登場人物の詳しい紹介をします

一撃必殺で家庭円満

ここは能力者が存在する世界の日本という国。

誤字ではありませんよ【日本】ですよ。

さて、この日本にある西京町という町は、小学校から大学までエスカレーター式の【九重学園】という巨大な学校がある事以外は普通の町だ。

この町に住むある一家、田村家が主人公なのですが…

あった。

中に入ると…どうやらここは少年の部屋ですね。

机に教科書。床には漫画雑誌が転がってます。

そしてベットに眠っている栗色の髪をした少年が田村家の長男、田村冬彦君、14才、九重学園中等部二年生。色々発症しやすい年齢ですね。

するとドアをノックする音が聞こえます。

「ふゆ兄入るよ」

銀髪で小さなポニーテール、糸目の少女が入ってきました。

彼女は田村家の次女、田村秋恵、8才、九重学園小等部二年生。紺色のブレザーと緑のリボンである学校の制服が可愛いですね。

「むゝ。まだ寝てる。遅刻しちゃうよ」

「もう少し……」

身体を揺すりますが、なかなか起きませんね。

「んゝ。黒太郎！」

秋恵ちゃんの掛け声と共に、彼女の影が立体的になり二つ目の背筋のよい黒い人のようなものになった。

「なんでしようかお嬢様？」

「ふゆ兄起こすからハリセン」

「承知いたしました」

すると影…黒太郎君が黒いハリセンの姿に変わった。

「せゝの！」

そして振りかぶり、布団に潜る冬彦君に…

「痛てえ！？」

直撃。

スパーンと良い音ですね。

どうやら影を操る能力なんでしょう。

「なにすんだ秋恵！痛いだろ！」

「起きないふゆ兄が悪いんだよ」

「自業自得ですよ、冬彦様」

「ちっ…ってもうこんな時間！？」

あわてて時計を見ると、もう家を出る時間だった。
おやおや、寝坊ですか。

「なんで起こしてくんなかったんだよ」

「ママは起こしに来たって言ってたよ。じゃあ私はパパとはる姉と
もう学校行くから」

「ちょ！まじ！？」

急いでベットから出るけど、そんなに焦ってはころびますよ。

「ふべ！」

あ、漫画につまづいて顔面から…。痛そう…

では玄関に向かいますか。

そこには男性と彼のネクタイを調える女性。秋恵ちゃんとは違い水

色のリボンをつけた制服姿の少女がいます。

「これでよし、と。じゃあ気をつけてね」

この栗色のショートカットに青い瞳の女性は田村夏希。田村家の母である。年齢は39才なのだがとてもそうは見えない程若々しい女性だ。

「じゃあ行ってくるね」

そしてこの短い銀髪に小さい眼鏡をかけた糸目の男が田村家の家長であり父である田村四季。年齢39才。職業教師。美人の妻、娘と色々とチートな親父である。

「いつてらっしゃい」

そして夫婦でお互いの頬に軽くキスをする。

夫婦仲が良くてなによりです。

……ええ、羨ましいですとも。

「あ、ママずるい！私も！」

そう言って四季お父さんに抱き着く栗色のロングヘアーに青い瞳の少女は田村家の長女、田村春奈。12才、九重学園中等部一年生。重度のファザコンで残念な美少女である。

「はいはい」

春奈ちゃんの頭を撫でながら受け流す。

「むう」

「ふゆ兄起きたよ」

階段を下りて秋恵ちゃんが玄関まで来ましたね。

「じゃあ、ねぼすけはほつといて行こっか」

「ママ、いつてきます」

「いつてきまゝす」

「いつてまいります奥様」

「はい。いつてらっしゃい」

手を振りながら夫と娘とその影を見送る妻。
実に平和な光景です。

「さてと。冬彦が朝ご飯終わるまでテレビでも見てよ」

すると階段をドタドタと騒がしい音をたててブレザーに水色のネクタイをした冬彦君が下りてきたようです。

「わりい母さん、朝飯いらな…」

「食べなさい」

「時間が…って、うお!？」

朝食を食べずに学校に行こうとした冬彦君の身体が中に浮かびました。

そしてそのままテーブルまで飛んでいつてしまいましたね。どうやらこれが夏希お母さんの能力みたいです。

「遅刻は寝坊した冬彦が悪いでしょ。さ、お皿洗えないから早く食べて」

「ちっ！食べば良いんだろ！」

「なんか文句ある？」

ギロリと睨む。

流石お母さん。怖いです。

「イエエ。ナンデモナイデス」

完全にビビった冬彦君は、そそくさとトースターに目玉焼きをのせて食べ出した。

ほらほら、早く食べないと遅刻しますよ。

「よろしい」

夏希お母さんは満足げに笑うと台所からポットに急須と湯のみを自分の回りに浮かばせながらリビングソファに座り、お茶を注ぎながらテレビを見だした。

「あら、あの俳優浮気したの。しかも相手はモデル？」

まんま主婦ですね。

「ごっそさん！じゃあ急ぐから！」

冬彦君は朝食が終わり鞆を持ち出発した。

「焦って事故にあったりしないようにね」

「わかってるって！いつてきます！」

玄関から勢いよく飛び出すと同時に手をかざすと、手元に身の丈程の大剣が現れた。

「電車はあと5分のはずだから……全速力で飛ばせば間に合うっ！」

そしてサーフボードのように剣に飛び乗ると、剣は凄い速さで冬彦君を乗せたまま飛んでいった。

勿論、切っ先ではなく柄が前ですよ。

大剣に乗る少年田村冬彦君。

彼以外にも、スカートを押さえながら足に風をまとって飛ぶ女学生。巨大な蝙蝠につかまって出社するバーコード頭のサラリーマン。

そんな非常識が常識な世界での朝の日常だった。

一撃必殺で家庭円満（後書き）

田村家全員的能力はすでに決まっています

二重螺旋と学園生活（前書き）

登場人物紹介

田村冬彦

容姿：栗色の短髪に赤い瞳、顔は中の上

能力：【Blade】

道具型。空間に剣を生み。し操る。

剣の形状は自由自在で、本数も成長とともに増やせる。

本人はもっぱら足場や乗り物などに利用している。

紹介：田村家の長男。特になにかに優れてる訳でもない普通の少年。

部活もやっておらず、成績も中くらい。

バカッフル両親に疲れつつ、末っ子に萌えるシスコンでもある。

現在彼女募集中だが告白された回数、ラブレターを貰った数はゼロ。

田村春奈

容姿：栗色のロングヘアに青い瞳、結構美少女

能力：【Bio&Cell】

肉体型。肉体変化、高速再生など自身の肉体を自在に操る。

身体から触手を伸ばす、爪や牙を生やす、身体の一部を切り離し操るなど応用は広い。

欠点として消耗が非常に大きく、食事が多くなってしまう。

紹介：田村家の長女。容姿端麗、成績優秀だが重度のファザコンである残念な美少女。

学校では料理部所属。

家族との仲は良好だが、兄に対しては結構冷たい。

ちなみに本人はツンデレ説を否定。

二重螺旋と学園生活

ここは九重学園。

小・中・高・大西京町の学生の大半が通うマンモス校であり、田村兄妹が通い、さらに田村父の職場でもある。

まずは高等部の職員室。

四季お父さんは高等部、二年三組の担任で、担当教科は日本史である。

「おはようございます」

「あ、おはようございます田村先生」

自分の席に鞆を起き隣の若い男性教員に挨拶した。
そして鞆からノートパソコンと手帳を取り出し、今日の予定を確認する。

「今日は一時間目が三組、四時間目が二組か。午後に一組と四組だな…」

手帳を見ながらホームルームの準備をする。

「田村先生。期末テストの範囲なんですが…」

先程の若い男性教員が話しかけて来た。

彼の名前は井出巧。四季お父さんと同じく日本担当の教員である。

イケメンは皆滅んでしまえば良いのに……
おっと、話しがそれてしまいましたね。

ちなみにこの学校はクラスが多いため、一つの教科を二人の教員が教えているようせです。

「ああ、たしか江戸時代からでしたね」

「それなんです、八組が授業変更で遅れてしまいました。なんとか授業時間を取ろうとはしてるんですが、他の先生の都合とかなかなか合わなくて……」

「まあ、いざとなったら範囲を狭めましょう」

「すみません」

「良いんですよ」

さ、お仕事の邪魔になりそうなのでそろそろ移動しますか。

次は中等部一年二組の教室。

春奈ちゃんが所属するクラスである。

「おはよう」

「おはよう」

「おっはよ」

春奈ちゃんは友人である二人の少女に挨拶し、自分の席に着かず袖から触手を伸ばし、鞆を自分の席に置き二人の前に立った。

「春奈、横着しないで席に行ったら」

このサイドポニーの少女は本原椎名。
春奈ちゃんの友人である。

「でも相変わらず春奈ちゃん的能力って便利よね。色々できるし太らないし」

そしてこっちのお下げの少女は小田要。
彼女も春奈ちゃんの友人である。

「でもすぐお腹すくのよね。それにけっこうグロいし」

「でも便利な事には変わらないよ。いいなあ…私は二人と違って能力者じゃないし」

「まあまあ」

そう言いながら椎名さんが頭を撫でる。

「あはは…。あ、そういえばさ、今日もうちの兄貴が寝坊してさ」

「また？先輩ってよく寝坊するね」

「顔は悪くないのに、なんか間抜けっぽいなあ」

「本当。どうしたらうちのパパからあんな男が生まれるんだか……。突然変異ね」

「うわ。容赦無いわね」

「良いのよ。あの阿保兄貴なら」

ツンデレなのかわかりかねませんが、彼女の評価は悪いようですね。頑張れ冬彦君。

そして次は小等部の二年一組の教室。
秋恵ちゃんの通う教室ですね。

「おはよ！」

「おはよう」

「田村さんおはよう」

クラスメートの子達と挨拶し、自分の席に着く。

「秋、おはよう」

「はよ〜」

秋恵ちゃんの席に二人の男の子が近づいてきた。

「あつ君とゆー君もおはよう」

あつ君こと島津厚司と、ゆー君こと淵上裕也の二人は秋恵ちゃんの友人である。

いやあモテモテですね。

「秋ちゃん。放課後皆で野球やんない？」

「人数足りねーんだ」

「いいよ」

子供は外で遊ぶものです。

実に良いですね。

「あ、あとさ。昨日の算数の宿題見せてくれよ。裕也のやつケチでさ」

厚司君はノートを取り出し、秋恵ちゃんの机に置く。

「宿題は自分でやらなきゃ意味無いだろ」

「そーだよー」

「頼むよ。友達だろ？」

「駄目」

「ガーン」

良い子は宿題はちゃんとやりましょう。

さてさて、次は九重学園へ向かう途中の冬彦君。

乗った大剣をサーフボードのように操り学校へ飛んでいく。

「やつべー。結局電車も乗り遅れちまったし…ん？」

目の前に必死になって走る九重学園の生徒がいた。
どうやらその少年に見覚えがあるらしい。

「丈！お前も遅刻か？」

「冬彦か！丁度いい。乗せてくれ！」

このロン毛の少年は大野丈。冬彦君の友人のようですね。

「嫌だね。何が楽しくて野郎とニケツしなきゃいけないんだ。お前は遅刻しろ！俺は間に合う！」

「酷っ！」

「ワハハハハ！」

冬彦は高笑いしながら飛んでいってしまった。

まあ乗せるなら女の子ですね。しかも可愛い娘を。
密着できるし。いやぁ良いですね。

「この！地獄に堕ちろ！でもやばい。まじで遅刻するよ」

走ってる丈君の隣に、今度は鎧を来た黒い大きな狼が現れた。
その背中にはロングヘア…というより、無造作に伸ばしたような
髪の高い少女がいた。

「おはよう丈。どうやら君も危ないみたいだね」

「ゴッド・ファンタジーのフェンリル！？って、小百合か！」

彼女は如月小百合。二人の友人ですね。

「昨日ガチャガチャで当ててね。早速実体化してみたよ。さっきの、
冬彦だね？」

「あいつ、自分だけ助かろうと俺を置いて行きやがったんだ！頼む、
乗せてくれ！」

「……仕方ないなあ」

「まじ？ありが…うえ！？」

すると狼が丈君をくわえ走りました。

「おい！これは無いだろ！」

「嫌だよ。何故君を乗せなきゃいけないんだ。運んであげるだけありがたく思え。…っと冬彦だ」

どうやら冬彦君に追いついたようです。

「おはよう冬彦」

「小百合か。あ？なんでこいつをくわえてんだ？」

「このセクハラ男を後ろに乗せる訳ないだろ？」

「なるほど」

「失礼な！俺は巨ぬー以外に興味は無い！」

胸をはって丈君が答える。

大きいのは男の浪漫ですね。

「……貧相な身体でよかったよ」

「偉そうに言ってるけど、お前すつげえ馬鹿っぽいぞ」

そんなこんなで校門が見えてきました。
学校まであと少し。急いで！

「よし！なんとか間に合いそうだな」

「うん。このまま全力疾走だ！」

そのまま校門をくぐろうとした瞬間。地面から何本も木が生え三人の進入を阻んだ。
木に衝突した三人はそのまま倒れ、冬彦君の乗ってた剣は消え、狼

もポンと煙りをたてて小さなフィギュアになった。

そして木が地面に消えると、スーツ姿の女教師が歩み寄って来た。

「田村、大野、如月…遅刻だ。後で職員室に来るように」

「そんな…」

「…がく」

「なん…だと…?」

結局三人一緒に遅刻してしまいましたね。

二重螺旋と学園生活（後書き）

なんだか今回も紹介みたいになってしまった…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8545x/>

能力者一家、田村家の日常

2011年10月27日16時05分発行